

## 平成 29 年度 アドバイザー派遣事業 実施レポート 西伯郡小教研外国語活動部会 第 2 回会員研修 報告

1 日時 平成 29 年 12 月 27 日 13:00~15:30

2 場所 伯耆町農村環境改善センター

3 講師 直山木綿子 氏

(文部科学省初等中等局教育課程課教科調査官)

### 4 研修内容

#### ①講 演

「これからの小学校外国語活動及び外国語に求められること」  
～移行期及び全面实施に向けて取り組むこと～

#### ②内 容

- ・先行実施と移行措置の違いや教材の意図。
- ・Let's try、We can の段階を追った特徴や内容、留意点。また、教材の使い方、その配列や内容の意図。
- ・小学校担任が英語活動を指導する意図。

#### ③感 想

##### ○本日の研修で参考になったこと

- ・具体的にどの学年でどんな内容を扱い、どのように授業を進めていけばよいのか(具体的な指導計画や内容)よく分かった。移行期間があることで、しっかりフォローしていく必要のある学年の子ども達についても理解できた。移行期間だから、余裕があるという訳ではないことが分かった。
- ・教材の使い方だけでなく、その配列や内容の意図までわかったことがとてもよかった。その意図を含みながら指導に生かしたい。
- ・Hi Friends と新教材 Let's try、We can の違いや移行期間にどの様な見通しをもって、指導していけばよいかよくわかった。また、小中連携はもちろん、小中連携の大切さも感じた。移行期間の指導計画の作成と全職員への研修が必要だと感じた。
- ・小学校と中学校の英語の違いというのがあいまいだったが、研修会の前より理解できた。場の工夫の仕方、英語のイメージが大きく変わると感じたので、教えていただいたことを実践したい。
- ・担任が他の教科・領域と関連付けて学習を進めるスタイルが小学校の強みであることが分かった。
- ・小学校の文化で英語をすることに効果があると分かったので、一緒に勉強する姿勢が大事という思いで、積極的に自分自身が使っていこうと思った。
- ・文節で切る、単語を書き写す、場面設定から単語の意味を類推するなど外国語で大切にすることが分かった。また、小中連携も行いたい。
- ・これから成長していく子ども達は、英語に早くから出会えることで、いろいろな夢や希望が広がると思った。“楽しさ”と“できることのうれしさ”を実感できるように授業を頑張りたい。
- ・教科書がどのような意図で作られているかよくわかった。今までは、中学の前倒しのようなイメージだ

ったが、楽しい英語ができそうな気がした。

- ・何のために外国語を使うのか目的意識のたせ方の必要性を感じた。また、すべての言葉が言えるようにしなくてもよいということが分かり、あまり固く考えすぎなくてもよいと思った。
- ・過去形等、以前話を聞いたときは学習内容が増えることに負担を大きく感じたが、今回の話しを聞いて、頑張っって指導したいと思った。ただ教え込むのではなく、実用的で子どもが英語を使いたいと思えるような楽しくて興味が持てる授業が必要だと思った。
- ・Let's try、We can の段階を追った特徴や内容、留意点を示して、小学校担任ができる英語活動の意図を語ってもらったので、内容が把握できてよかった。また、準備が整えてあると分かった。

##### ○先行実施に向けて取り組んでみようと思ったこと

- ・教材を読み込んでおく必要があると思った。また、中学校で学ぶ単語や文法を確認しておきたい。
- ・必要なものをダウンロードして、しっかり目を通していききたい。授業の中で使えるものを 3 学期から取り入れたい。また、日頃から英語に触れて、自分の英語力、関心を高めたい。児童に身近な話したくなる内容で話形を使い「慣れ親しみ」を実感できるようにしたい。また、日本語を使わずに音から類推する英語に向けて、場面設定の工夫を研究したい。
- ・ちょっとした場面で、英語を取り入れてみたり、外国の友人と英語で話す時間をもったりしたい。
- ・受容語彙という言葉を知り、子ども達がたくさんの言葉に出会えるようにしていきたい。また、ALT と打ち合わせをして、学習の狙いに沿って学習活動を考えていきたい。そして、QR コードを読み取って聞いてみたり、small talk をしたりしようと思った。
- ・アルファベットだけでも正しい発音をしたい。

### 5 研修を振り返って

今回の講演会で大切だと思ったことが三つあった。

まず一つ目は、移行期間による学習空白をつくらないための手立てである。新学習指導要領では 600~700 の語彙を学習するため、学習空白があると習得する語彙数が減ってしまう。小学校から中学校へと計画的な単元配当を行う必要があることが分かった。

二つ目は、英語を使う必要性を持たせることである。子ども達が英語に触れる機会をつくることはもちろんだが、英語を話す機会を意図的、計画的に仕組んでいく必要がある。そのための教材研究が大切になる。

三つ目は、学習のゴールイメージを明確に持つことである。外国語科の子ども達のめあては「できるようになる」に変更される。全員が自分の考えや気持ちを表現できる場面を設定することで、主体的に会話する力をつける学習が求められる。